



第23回

少年の主張 鏡石町大会



8月6日(金)、町図書館で第23回少年の主張鏡石町大会が開催され、小学生4人、中学生3人が出場し、日ごろ感じたことや考えていることなどを発表しました。

最優秀賞は、小学生の部は面川瑤青さん(鏡石二小6年)、中学生の部は児島柚乃さん(鏡石中3年)の2人が受賞しました。また、藤井史織さん(鏡石一小6年)、坂本紗都音さん(鏡石中2年)の2人が優秀賞を受賞しました。中学校の部に出場した3人は、県大会に推薦されます。最優秀賞を受賞した2人の作品を紹介します。

「言葉を一語一語」

鏡石二小6年 面川 瑤青

五年生の三学期。私たちのクラスに初めての転校生がやってきました。しかも、外国から！その女の子は、フィリピンからの転入生でした。始業式の日、転入生は、一生けんめい勉強してきた日本語であいさつをしてくれました。でも、それ以外の日本語は分からないようでした。その子はとても緊張しているように感じました。その様子を見て、私は、(きつと日本の学校生活を不安に思っているにちがいない。早く友達になって、安心させてあげよう。)と考えました。

私は英語が苦手な方なので、英語辞書を買ってもらい、単語を調べながら話すことにしました。最初は自分の言いたいことがうまく説明できませんでしたが、彼女は根気強く私の話を聞いてくれました。そして、話を通じたと感じることが増え、話すことがどんどん楽しくなっていました。

「今こそ感謝を」

鏡石中3年 児島 柚乃

「学校遅れるよ。」母は、私に大きな声で言いました。一年生の時は、今よりもかなり早い時間に家を出ていたのに、気づけば登校時間は、どんどん遅くなる一方で、ついには、母親の大声が、ぎりぎり遅刻を免れる唯一の手段になっていった。いつからこんなことになってしまったのだろうか。中学生になってからは、部活動や定期テスト、様々な行事、自分にとって新しい出来事が次から次へやってきて、時間は、あつという間に過ぎていった。正直、ついていくのがやっとだった。もう少し、正直に言えば、惰性でここまで来てしまったような感じだ。私の中学校生活は、「やらされ感」ありありの毎日だった。母に起こされ、やつのことまでどろどろした学校にも、意義を見いだせない自分がある。私は、そんな中学生だった。ついこの間までは……

それから約一か月後、六年生を送る会の準備を始めることになりました。私たちは、転入生が好きなアイドルグループの曲に合わせてダンスをすることにしました。私はその子と同じチームになつて、いっしょにふりつけを考えていきました。今まで通り、辞書を使い、通やくしながら練習をしていきました。彼女も、少しずつ日本語が分かるようになり、いろいろなアイデアを出してくれました。でも、送る会が近づいてつれて、私には余裕がなくなつてしまつたのです。提案されたふりつけをまとめることからです。他のチームのダンスは完成してきていたもので、あせりからイライラがかくせなくなりました。転入生の意見を通やくすることもなくなり、ついに、その子が



そんな私に転機が訪れたのは、三年生になってからのことだ。部活動の引退。このことが、私の感情にある変化をもたらしただけである。それは、感謝の気持ちだった。なぜか、それまで気づかなかつたことに気づいたのだ。自分についている人や物に支えられて生きてきたんだな。」ということに。



私は、この三年間、壁にぶつかつたり、悩んだりするところが度々あつた。そんな時、私を助けてくれたのは、周りの人々だった。そのときは、あまり分からなかつたのだが、今思えば、私の生活には、多くの人たちの関わりがあつたことに気づく。例えば、部活動の大会での送り迎えや弁当の準備。そんな時支えてくれたのは誰か。修学旅行はどうだろう。今年は、特にコロナウイルス感染

話していても、「もういいよ。」ときつくあたるようになりました。彼女の笑顔が少なくなつていくのも分かつていました。自分の気持ちをコントロールすることができませんでした。私は家でも不機嫌な態度で過ごしていました。そんな私を見て、祖母がはつきり言いました。「あなたは自分の気持ちが伝わらなくて、自分だけがつらいと思つているみたいだけど、友達だつて、あなたに気持ちが伝わらなくて苦しんでいるんじゃないの。」

私ははつとしました。「彼女には、私に言いたいことがたくさんあつたはずだ。それを日本語で説明できなくて、もどかしい気持ちだつただろう。きつと言いたいことがあつてもがまんしているにちがいない。それでも、あの子は、私の話を最後まで聞こうとしてくれていた。」私は、自分の気持ちをわかつてもらおうとするだけで、相手の気持ちを考えていないことに気づいたので。「転校してきただけの友達を支えてあげよう。」そう考えていた気持ちです。そう思うと少し寂しく感じられる。私は、一人ではなかつた。朝起きてから、寝るまで、あらゆる人々との関わりの中で生きていく。これが今の私を作っているのだ。当たり前前に感じていた毎日から自分を支えてくれるかけがえのない人たちがいることに気づくことができたのは、この三年間で自分が成長できた証だと思ふ。

「あなたは今、後悔しているのか、想像しながら聞くように心がけました。私の気持ちが伝わつたのか、彼女も以前より日本語やジェスチャーでたくさん話そうとしてくれるようになりました。すると、この友達は私の計画が不満なのではなく、みんなの発表がよくなるために私に意見を伝えているんだ、ということが分かつたのです。ふたりに笑顔がもどり、「今、心が通じたな。」と思うことも増えてきました。そして、六年生を送る会では、練習の成果を出し切り、最高のダンス発表にすることができました。

私は、この体験から、たとえ言葉が通じなくても、相手の気持ちを理解したり、自分の気持ちをわかつてもらつたりすることができると学びました。言葉こそえて、心が通じ合うには、お互いが相手の気持ちを想像しながら言葉やジェスチャーが最も大切だということを知つたのです。

